## 津市片田井戸町

## 志保遺跡発掘調査報告

1983.3

三重県教育委員会

### 序 文

津市の西郊外に位置する片田一帯は、津市内の遺跡分布状況からみても、特に多数の遺跡が密集しているところであります。長谷山丘陵一帯は坂本山古墳群を中心に数百基以上の古墳の所在が確認されており、県下でも有数の古墳文化が形成されたところと言えます。

志保遺跡もこうした環境の中に位置するものでありますが、河川改修、それも災害関連工事という緊急性を有するものであり、どうしても遺跡の一部がその工事域にかかることとなり、このたび事前に発掘調査をする運びとなったものです。

この調査では古墳時代の多くの遺物と、平安時代末頃〜鎌倉時代に比定される建物の一部が検出されており、各時代時代の集落の変遷を考える上で重要な資料を提供しております。

いずれにしても、津西部の文化の地域性を捉える意味で、本調査の成果は大きく、 報告書として公表するに当たってより多くの活用を期待するものであります。

調査に際して終始、ご協力の労を惜しまれなかった、県土木部の各関係機関、そして、土地改良区をはじめ地元の多くの人々のお世話になったわけであります。ここに記して感謝の意を表します。

昭和58年3月

三重県教育委員会

教育長 佐々木 昇

### 例 言

- 1. 本書は三重県教育委員会が、県土木部から執行委任を受けて実施した二級河川 岩田川災害関連工事にかかる津市片田井戸町に所在する志保遺跡の発掘調査の結 果をまとめたものである。
- 2. 調査は下記の体制で行なった。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県教育委員会文化課 主事・本堂弘之

主事・福村直人

調查協力 県土木部河川課 県農林水産部耕地第二課

県津土木事務所 県津耕地事務所

津西部土地改良区

津市教育委員会

- 3. 発掘調査後の整理、及び報告書作成は文化課主事・高見宜雄、主事・杉谷政樹、 技師・新田 洋が行なった。
- 4. 本遺跡の遺跡標示略記号は4FSBで、各遺構標示略記号は下記による。また、 図面上の方位はすべて磁北を用いた。

SB; 掘立柱建物 SD; 溝 SK; 土坛

5. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

## 目 次

Ι	前			<b></b>	1
II	位	置	と環	境····································	2
Ш	遺			構	3
IV	出	土	遺	物······	3
V	結			語	6

## 図版目次

- P L 1 遺跡位置図
- P L 2 遺跡地形図
- PL3 発掘区位置図・遺構平面図
- P L 4 出土遺物実測図
- P L 5 航空写真·発掘区全景
- PL6 発掘区中央部・SD2・SK3
- PL7 遺物写真
- PL8 遺物写真

## I 前 言

各種公共事業にかかる埋蔵文化財保護の問題は年々増加の傾向にある。県教育委員会では年度 毎の事業計画を各開発担当課あてに事業照会を行ない、事前に遺跡地図、分布調査等によって遺 跡所在の有無を確認し、その結果にもとづいて各担当課に文化財保護に支障のないような工事計 画を変更するよう要請している。

志保遺跡は、昭和57年度県営圃場整備事業の津西部地区内に所在するもので、当初、農林水産 部耕地第二課、津耕地事務所、津西部土地改良区と県文化課との間で協議がもたれた。昭和57年 2月に事業計画図面による分布調査の結果、河川を狭む両側(北と南)の畑地を中心に広がる約 9,000㎡ が遺跡範囲と判断され、畑地を中心に、古墳時代の土師器、須恵器、中世の山茶椀、土師 器(鍋、小皿)等が表面観察され、古墳時代と中世(鎌倉時代)の集落跡であることが推定され た。同年4月から5月にかけて、遺跡の取り扱いについて田畑の切り盛り調整による具体的な保 護措置について津耕地事務所との協議をした結果、井戸川北側の畑地、及び、南側の水田につい ては現標高の最も高い部分を中心に山なり整地をして遺跡を保護するという設計変更がなされ、 削平部にかかる遺跡範囲は約1,300m と縮少した。この時点で、県土木部河川課を主体とする井戸 川改修予定があることが判明したが、具体的な工事施工、予算については、農林水産部と土木部 の間で協議中の段階にあった。河川掘削の際の排土を圃場整備事業の整地工事で使用するという ことで、とりあえず先の1,300m<sup>2</sup>部分の遺跡の地下状況(遺物包含層、遺構の有無など)を把握す るため、県圃の中で試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、昭和57年6月8・9日の2 日間にわたり、2m×4mの試掘坑を河川改修予定敷(東西に走る)にほゞ20m間隔に7箇所設 定して行なった。その結果、2個のグリッドで、土広、柱穴が検出され、古墳時代の土師器と須 恵器、及び、表面観察では予想できなかった円筒埴輪片等が出土した。他のグリッドについては、 遺構、遺物がみられず、遺跡としては分布調査結果ほどに東西に延びないものと判断され、河川 改修計画の掘削部図面と照合して、東西約50m 、南北10m の範囲、約500m については確実に遺 構が検出されることが推定され、この部分の取り扱いがその後の協議の対象となった。

河川改修については災害関連工事でもあり緊急性を要し、また、すでに工事施工予定地は買収済みで、ルート変更についても不可能であり、遺跡範囲の明確になった約500㎡について事前に発掘調査を実施することとなった。調査経費は事業主体として確定した県土木部が全額負担することになったが、調査時期については圃場整備事業(掘削排土の利用)とのからみも加わり、年度内に完了という前提となった。

そして当教育委員会では、早急に県土木部に対し文化財保護法第57条の3第1項による法的手続きの提出を求め調査の準備をすすめたが、昭和57年内の調査は不可能であり、翌58年2月22日

から同年3月31までで現地調査を終了するということで調査を実施することに至った。

2~3月という 寒気の残る候、津西部土地改良区をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご協力を得て業務を遂行できたことについて、末筆ながら厚くお礼申し上げます。

## Ⅱ 位置と環境

志保遺跡(矢印)は現行政区画上、津市片田井戸町字志保に所在し、ちょうど主要地方道奈良・津線と県道片田井戸・久居線の交差地点の北側一帯の岩田川の両域にかかる東西に長い畑地を中心とし、表面の遺物散布状況からすると約9,000㎡が遺跡範囲と考えられる。地形立地的には安芸郡美里村から津市内をほぼ東西に流れる二級河川岩田川(当地域では井戸川と通称される)右岸の河岸段丘上にあり、標高11~12mである。

志保遺跡の周辺に分布する遺跡を概観すると、弥生時代の遺跡としては、森添遺跡(1)〈弥生時代後期の甕・高杯・脚付椀・凹石等が出土〉や桶田遺跡などの他に、2kmほど東方に大ヶ瀬遺跡〈昭和40年度の発掘調査で、丘陵上に住居跡が確認〉、10kmほど東方に高松弥生墳墓〈昭和50年度発掘調査実施〉などが岩田川流域に所在する。一方、岩田川と並行して伊勢湾に流れ込んでいる安濃川流域では、北東方向約5km隔てた所に納所遺跡〈昭和49・50年度発掘調査を実施し、県下最大規模の弥生時代の遺跡として確認された〉や、亀井遺跡〈昭和47年度発掘調査を実施し、弥生時代中期の土器が出土し、双脚壺等も出土〉等多数の弥生時代の遺跡が集中している。

古墳時代の遺跡としては、高井古墳(2)〈昭和31年度発掘調査を実施し、横穴式石室をもった径14mの円墳で、その南麓から土師器合口甕棺を出土。なお現在は津市の史跡指定を受けている〉や、新畑遺跡(3)〈昭和48年度発掘調査を実施し、古墳時代の集落跡であることが確認されている〉、植田古墳(4)、池下古墳(5)、桐狭間古墳(6)〈1号墳から形象埴輪が出土〉、奄下古墳(7)、桶田古墳群(8)〈木棺直葬〉、青のり古墳(9)、東谷山古墳群(10)、八乳合3号墳(11)〈消滅〉、八乳合1~2号墳(12)、堂山古墳(13)〈消滅〉、岡崎古墳(14)、片田東浦古墳群(15)〈消滅〉、坂本山古墳群(16)〈昭和44年度発掘調査を実施し、5世紀初頭に位置づけられることが確認されており、複合口縁で底部に穿孔された土師器壺などが出土〉や、北方2.5㎞ほどの長谷山丘陵に分布する長谷山古墳群(17)〈古墳時代後期の群集墳で、県下でも最大規模の群集墳である〉などが存在する。

奈良時代以降の遺跡としては、片田城跡(18)や、坂本山中世墓群〈坂本山古墳群の中に重複して 所在する。蔵骨器を伴なう〉、小舟遺跡(19)〈古墳時代~室町時代の集落跡〉などがある。

以上、簡単に周辺の遺跡の概況を触れるにとどめたが、考古学的にも未解明の部分の多い当地域の解明に本調査の成果はその一助となるものと思われる。

## Ⅲ遺構

土層の基本的層序は上から第 I 層;暗灰土(耕作土)、第 II 層;赤味がかった茶褐色土、第 III 層; 黄褐色土、第 IV 層; 黄褐色砂質土(地山)となる。遺構は第 III 層上面で確認され、本調査で検出されたものはこれにあたる。時期的には柱穴内の遺物から中世(平安時代末~鎌倉時代前半)と判断される。第 III 層上層には弥生時代後期から古墳時代後期までの遺物を含むが、中世の遺構は、第 III 層(弥生末~古墳時代後期に至る包含層)を切って、あるいは、ある程度削平されて築かれたものと判断される。第 II 層は平安時代末~鎌倉時代前半頃の遺物を含み、それより下るものはみられない。調査終了段階において、古墳時代の遺構(下層遺構)の存在も十分に予想されたため、発掘区中央部に幅 3 m 余で南北にトレンチを設定してその有無を確認調査した結果、 III 層と IV 層との区別は極めて漸移的で遺構は全く検出できなかった。第 III 層そのものが、河川による自然堆積層(遺物を同時に持ち込んだ)とも考えられる。

検出された遺構としては柱穴、土坑、溝状遺構があり、調査区が限定されている点もあり、全体としてまとまりは少ない。以下、個々概述するが、時期的には平安時代末~鎌倉時代前半頃に 比定されるものである。

#### S B 1

2間×2間で、一辺約4.5mの正方形を呈する総柱掘立柱建物と考えられる。柱間は等間で、約2.1~2.2mである。東側中央の柱は未確認である。柱掘形は円形で25~30cm程度と小さく、深さは30cm前後である。埋土は炭を少量含む褐灰色で、北側の中央柱穴内には山茶椀口縁部片を含む。居住建物というより、倉庫、あるいは納屋的な機能をもつものであろう。

#### S D 2

発掘区の中央や、東寄りに検出された、幅約50cm、長さ約4m、深さ15~20cmの底の平坦な短い溝状のもので、西端は柱穴と重複したものと考えられる。

#### **SK3**

南北60cm前後、東西1.5 m余、深さ20cm余の浅い不定形の土拡で、埋土内からは炭少量の他、土師器小皿小片が出土しているが、性格は不明である。

## IV 出土遺物

出土遺物は埴輪を除くとすべて土器で、種類としては弥生土器(高杯片)、土師器(高杯、甕、壺、鍋、小皿)、須恵器(杯、甕)、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、陶器(常滑片)がある。時期的には弥生時代後期末頃をその上限として、古墳時代(前期末~後期)に属するものと平安時代末~鎌

倉時代前半頃に属するものに大別できる。奈良時代、及び平安時代(前半~後半)の土器は認めれず、遺物的にはこの時代が空白期と言える。全体に小片が多く、以下、図示し得たものについて時代別に個々概述してゆきたい。これらはすべて包含層中出土のものである。

#### 1. 古墳時代前期の土師器

#### 壺形土器 (1・3)

1は口径25cm余、2は復元口径14cm余の口縁部がラッパ状の二重口縁をもつ壺形土器である。 ほ、球状でや、下膨れの肩の張る体部と平底がつくものと推定される。色調は橙褐色を呈し、胎 土は比較的精良である。全体に磨耗がすすみ、調整技法は不詳である。

#### 蹇形土器A(2)

くの字形に強く外反する口縁部は短くのび、端部は肥厚し、外側に面をつくる。いわゆるS字 状口縁甕の退化型式と考えられ、肩の張った卵状の体部と底部には脚台がつくものと推定される。 口縁部は内外面ともにヨコナデされている。外面には斜め方向のハケメがのこるが、全体に磨耗 がすすんでいる。色調は灰褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。

#### 甕形土器B (5)

口径約11.6m で、短く外反してのびる口縁部は、端部で器壁が薄くなり、内側にナデつけによるや、広い面をつくる。色調は赤味の強い淡褐色を呈し、胎土中には石粒が多い。甕というより短頸壺の形態とした方がよいかもしれない。

#### 高杯形土器 (4)

杯部を欠損した高杯の脚部分で、ハの字形に直線的にのび、すそ部はや、なだらかにおわる。 端部は外側に面をつくり、上下にや、肥厚する。色調は黄味をおびた灰褐色を呈し、砂粒を少量 含む。

#### 2. 古墳時代後期の須恵器

#### 杯蓋 A (6)

復元径約16.4cmで天井部を欠損するもので、口縁部との境は沈線によって区分されている。青灰色を呈し、胎土中には微量の砂粒を含む。

#### 杯蓋B (7 · 8)

7は口径11.0cm、8は12cmと小ぶりの蓋で、丸味の強い天井部をもつ。7の天井部はヘラ切りのままで未調整である。色調は7が淡灰色、8が青灰色を呈し、胎土は両者とも堅緻である。

#### 杯身 (9)

口径11.2cm、器高 3.4cmで口縁部は外反気味に立ち上る。口縁部内外面はロクロナデされ、内底面は不定方向のナデがみられる。外底部には粘土紐巻き上げ痕がそのま、残り未調整である。 色調は淡青灰色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好である。

#### 高杯 (10)

長脚二段透しをもつ高杯で、杯部は口径15.4cmである。口縁部の立ち上りは内傾して立ち上る。 体部は約号がヘラ削り調整されている。ロクロ回転は順廻りである。

脚部内側には絞り目がのこる。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。焼成は良好。

#### 3. 古墳時代後期の円筒埴輪

- (18) は口径18.6cmの円筒埴輪の上部破片である。外面には左上一右下方向にハケメが残る。 ハケメの調整は上から見て時計廻りの方向に上へ重ねてナデつけられている。内面には上端から 9mmの幅で粘土が折り返してある。折り返しの下には 3.3 cmの幅で粘土紐巻き上げの痕跡が残る。 胎土中には砂粒を含んでいないが、残存状況が悪く脆弱である。
- (19) は上下端を欠いた破片である。径は下部で16.8cm、上部では20.6cmで、上方でわずかに開いている。タガは2段が判明しており、上のタガは中央部で浅い凹みがある。またタガの上面・下面共に指でナデつけた痕跡か、凹みをもっている。下のタガは磨滅が著しく、中央部でやや凹みをみせているが上の段のタガほど明瞭ではない。また、タガの下には指でナデつけた痕跡がタガと平行して走っている。タガの間には、直径5.8cmほどの一対の円形をした透し孔が上段のタガ下 1.4 cmの所に、外から内へ向けて穿孔されている。胎土・器壁の残存状況も(18)と酷似している。

#### 4. 平安時代末葉の土器

#### A. 土 師 器

#### 小皿A (11·12)

11は口径 8 cm余、12は 9 cm余のや、厚手の小皿である。いずれも口縁部外面を強くヨコナデし、 底部との境が明瞭となっている。内面はナデ調整、口縁以下は未調整で凹凸をのこしている。11 はくすんだ淡褐色、12は肌色に似た白褐色を呈し、両者とも細砂粒を含む。

#### 小皿B (13)

いわゆるロクロ成形によってつくられた皿で底部には糸切り痕をのこす。内外面とも磨耗しており調整技法は不詳であるが、口縁部は強くヨコナデされており、端部はほ、水平にのびる。色調は黄褐色を呈し、胎土中には金雲母片の他、砂粒を含む。口径10.8cm、高さ1.6cmでほ、完形品である。

#### 鍋 (16)

厚い器壁をもつ鍋の口縁部で、くの字形に外反して、端部は内側に丸く折り返されている。口 縁部内外面はヨコナデ調整されるが、体部外面は未調整で、ユビオサエによる凹凸をのこす。口 縁外面には煤の付着がみられる。

#### B. 陶 器

#### 山茶椀 (14・15)

口径にくらべ器高が低く、なだらかな丸味をもつ体部をもつが、15では口縁部がや、外反している。高台は14では逆台形、15では逆三角形を呈する。色調は白味をおびた灰色で胎土は両者ともに堅緻である。全体のつくりは丁寧であり、山茶椀の中でも古手のものと考えられる。

#### C. 磁 器

#### 白磁椀 (17)

いわゆる玉縁状口縁をもつもので、口縁部の外側の肥厚した部分の直下には幅 6 mmの沈線が走る。色調は白濁色で、釉厚は0.3 mm程度である。胎土は灰白色で堅緻である。

#### V 結 語

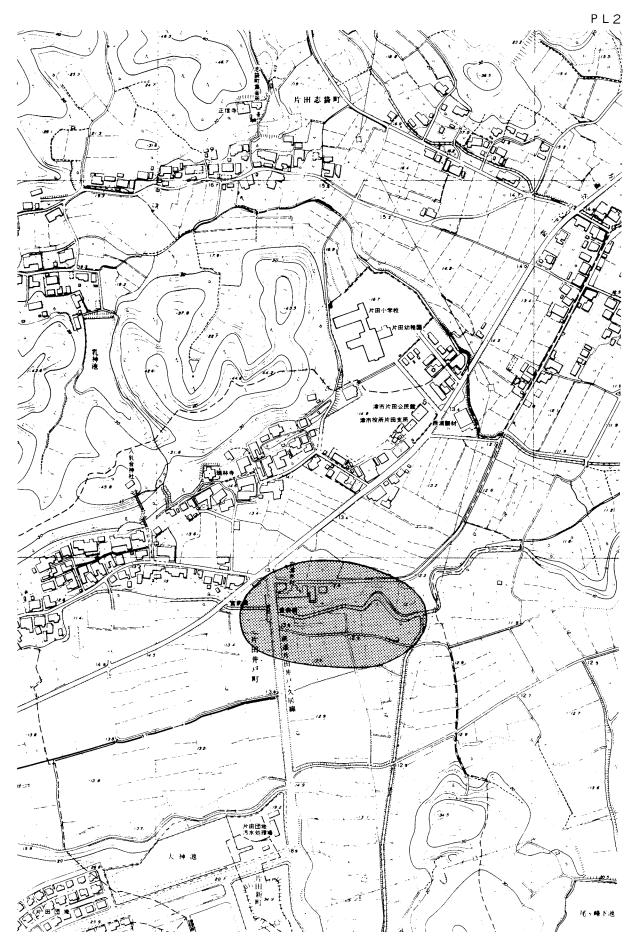
志保遺跡は、出土遺物からみると、弥生時代後期末をその上限とし、中世(鎌倉時代前半)を 下限とする集落跡と考えられるが、古墳時代前期前半と奈良~平安時代後半頃の時代の生活痕 跡は認められない。今回検出された遺構は平安時代末~鎌倉時代前半頃までに位置付けられるも のであるが、集落跡の一隅がうかがえるものの、その全容、性格を考えるまでには到底いたらない。 以下、小面積の発掘ではあるが、本調査によって明らかになった点、気付いた点等について箇 条書きにしておき、今後のより詳細な検討を課題としてまとめとしたい。

- 1. 岩田川中流域において弥生時代後期の土器出土はこれまで昭和46年度に発掘調査された柳谷遺跡、大ヶ瀬遺跡、森添遺跡等で確認されているが、本遺跡での出土によって、後期の遺跡がより上流域まで所在することが明らかになった。
- 2. 古墳時代前期(5世紀前半頃)と考えられる複合口縁をもつ土師器壺は津市内では新畑遺跡、中鳶遺跡、納所遺跡等の集落跡、又、古墳出土例としては坂本山古墳で類例がある。しかし、この時期の土師器はいわゆる一括資料として捉えられるものが少なく、土器編年上でも希薄な時期であり、今後さらに類例の増加をまって検討を加えたい。
- 3. 地形的に古墳の存在が考え難いところで、円筒埴輪を比較的多量に出土しているが、あるいは、古墳祭祀以外の用途に使われたとも考えられる。埴輪は6世紀前半頃に比定され、この時期に見合う遺物はみられない。

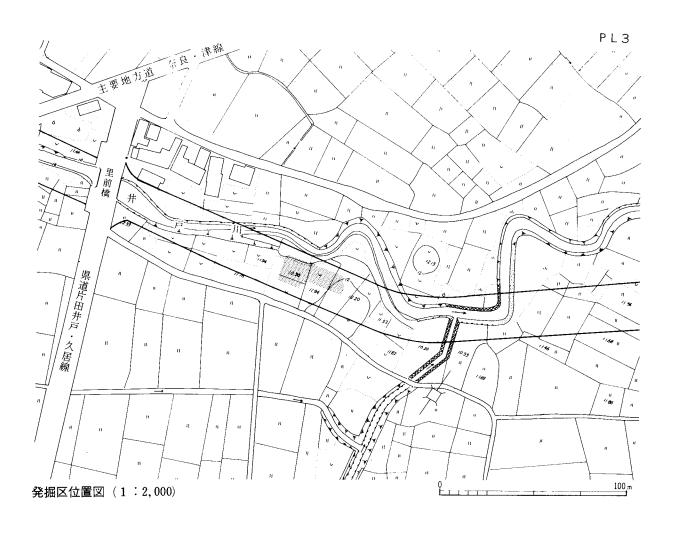
# 図 版

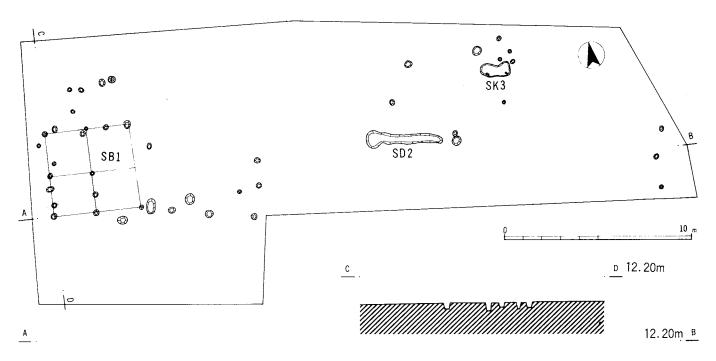


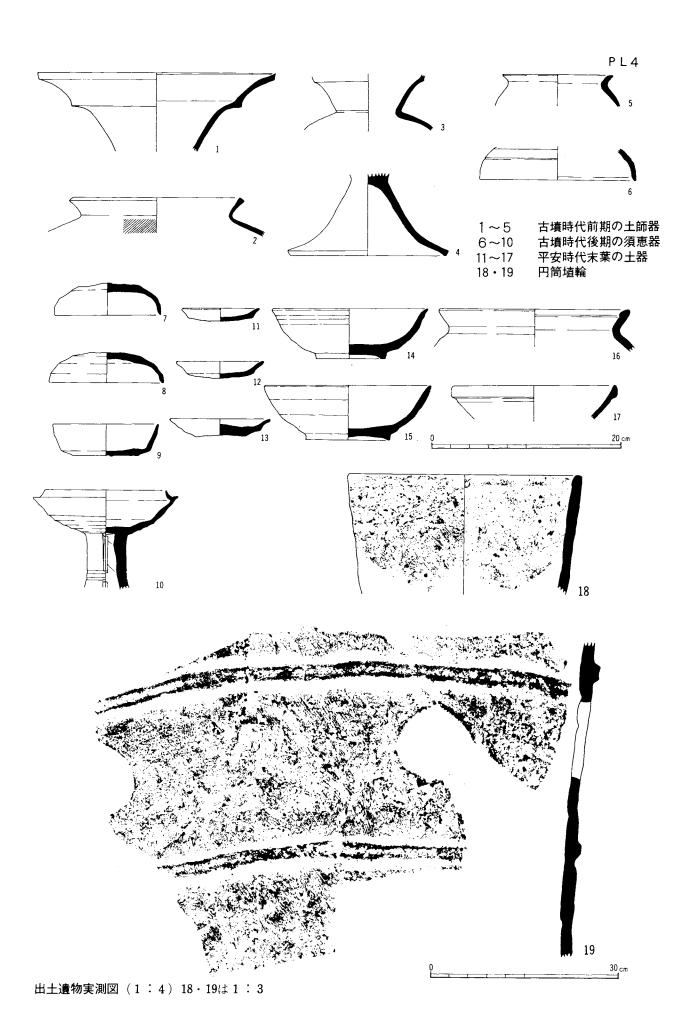
|:25,000 津西部 国土地理院



遺跡地形図 (1:5,000)

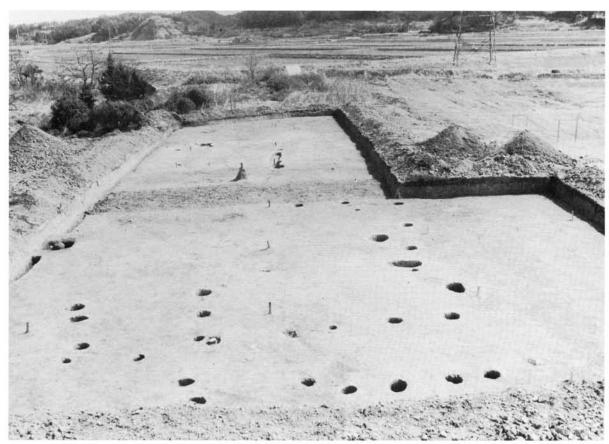




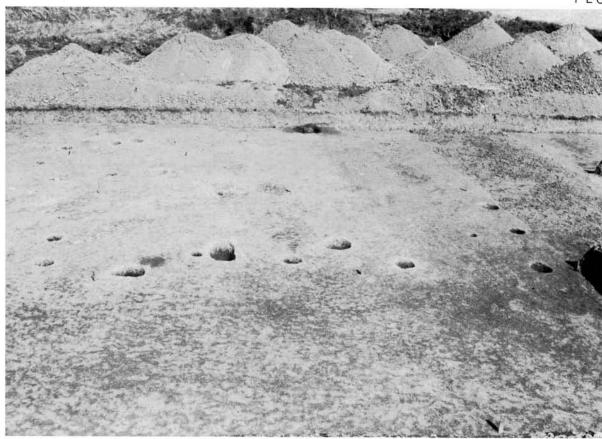




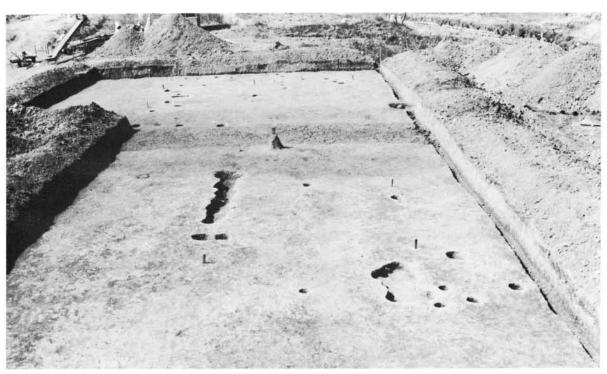
航空写真



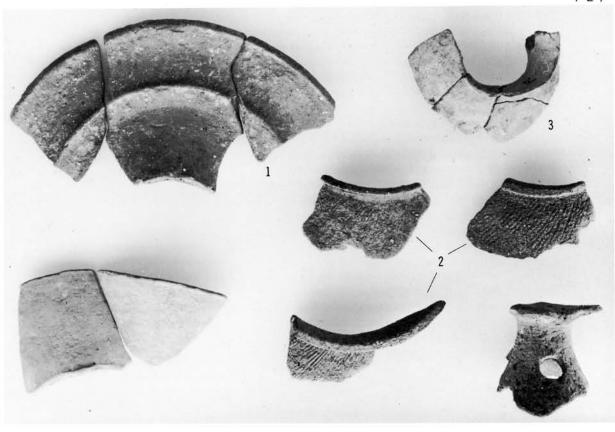
発掘区全景・SB1 (西から)



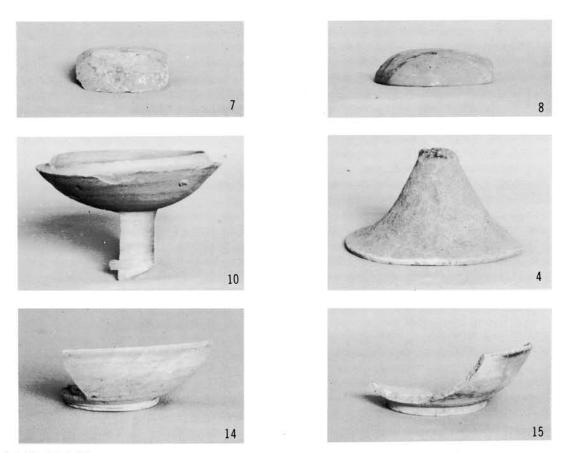
発掘区中央部 (南から)



SD2・SK3 (東から)



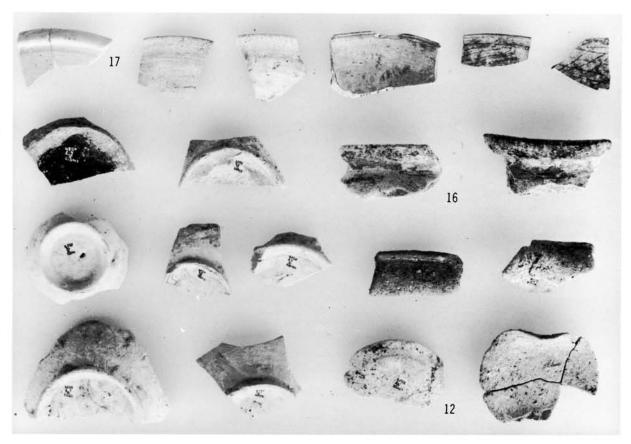
出土土器 (1:3)



出土土器 (1:3)



円筒埴輪(1:3)



出土土器 (1:3)

昭和58 (1983) 年3月に刊行されたものをもとに 平成16 (2004) 年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告62

志保遺跡発掘調査報告 昭和58年3月31日

編集 三重県教育委員会発行

印刷 東海印刷株式会社